

独立の目標を放棄すれば中国の弾圧は消えるのか？

ハダ著

2015年8月29日

1997年にアメリカで設立された内モンゴル人民党は、結党当初から南モンゴルの独立を強く掲げていた。この基本方針は、党大会と当時の党首テムチルト・ショブチョードを含む党幹部によって正式に採択された。テムチルト氏がこの原則を2011年5月まで堅持していたことは、記録に残されている。

2011年5月11日、シリングル盟で牧民のメルゲン氏が中国人により残酷に殺害された事件をきっかけに、数万人の南モンゴル人学生と牧民が抗議のために立ち上がった。海外の南モンゴル人たちもこれに呼応して世界各地で抗議活動を行った。一方、南モンゴルの現地では中国当局が警察と武装警察を動員し、激しく鎮圧にかかった。

ちょうどその頃に、当時党首であったテムチルト氏は、一方的に南モンゴルの独立という神聖かつ不可侵な権利を放棄する声明を発表した。しかも個人としてではなく、党を代表しての発言であった。声明はメディアに報道され、「内モンゴル人民党はもはや独立を追求しない」と広く伝えられた。

同じインタビューで、テムチルト氏は「二元所有論」と称する理論を披露し、中国人植民者と先住の南モンゴル人が互いに害さず共存できると主張した。この理論の誤りについてここでは詳述しないが、大きな論争を巻き起こした。特に、亡命作家トメンウルジー・ブヤンメンド氏がこの理論を批判したところ、テムチルト氏によって「中国のスパイ」と誹謗されたことが注目されていた。

本稿の主目的は、テムチルト氏の「独立は中国当局に圧力をかけるための手段にすぎず、独立を放棄すれば弾圧もなくなる」という根拠なき歪んだ主張を否定することである。

中国の植民体制が、南モンゴル人の自由への願いを絶やそうと、監視・弾圧・暴力を常に続けてきたことは動かしがたい事実である。南モンゴル人の政治的独立への追求は、植民地支配下での耐え難い苦しみに根ざした正当なものであり、国際人道法にも完全に合致している。これを裏付ける資料も豊富に存在する。

「独立を放棄すれば弾圧は消える」というテムチルト氏の主張は、事実無根であり、極めて危険なほどにナイーブである。たとえば、1981年の学生運動、2011年5月の蜂起、現在も続く牧民の抗議活動など、いずれも独立を公然と訴えてはいなかったが、い

ずれも残酷に鎮圧された。もし「外国の干渉」が理由ならば、1956～1957年の「反右派民族主義者粛清」はどう説明するのか。これはいかなる外国の関与もなかった。

問題の本質は明白である。中国が南モンゴルに求めているのは、先住モンゴル人から政治的権利を奪い、民族的アイデンティティを否定し、自然資源を略奪することだ。すべての抗議と抵抗行動は、この植民地政策に起因している。政権は弾圧を正当化する口実を常に探し、加害者を美化し、抵抗者を悪者にしてきた。

現在の残虐行為の根本的原因は、植民地支配の確立にあり、その起源は1911年の辛亥革命にまで遡る。これらの暴力の歴史は忘れ去られておらず、現在の政権の行動原理の一部をなしている。弾圧は、この政権の本質を覆い隠すためにあるのだ。

南モンゴル人の先住民としての権利の侵害は今も続いており、それに対する抵抗も決して途絶えたことはない。声を上げた者は「分離主義者」や「国家の統一を脅かす存在」としてレッテルを貼られる。

南モンゴル人は二つの選択肢に直面している。沈黙して権利を奪われるか、立ち上がって戦うかだ。沈黙は安全を保証しない。従順な者ですらしばしば弾圧の対象となる。リスクを伴う抵抗こそが希望をもたらす。投獄や死の可能性すらあるが、それでも多くの有志者が自らの民族と未来のためにこの道を選んでいる。

では、我々モンゴル人は何をなすべきか？ 答えは明白である——抵抗することだ。抵抗なくしては、我々のアイデンティティも文化も民族も消えてしまう。もちろん、抵抗には危険が伴う。しかし、抵抗を放棄することは、敗北を意味する。投獄を覚悟する者もいれば、沈黙を選ぶ者もいる。その選択を非難すべきではない。ただし、抵抗する者は、その代償を受け入れる覚悟を持つべきである。

「達成可能な短期目標に集中するためには、独立の目標を捨てるべきだ」という議論は、全く馬鹿げている。実際には、民衆の当面の利益を追求する人々も、独立という長期的なビジョンを持ち続けることができる。これらは相反する目標ではない。今日の状況では、独立を掲げる内モンゴル人民党も、そうでない団体も、いずれも弾圧に立ち向かう闘いを共にしている。テムチルト氏はそのことを十分に理解しているはずである。

政治団体である内モンゴル人民党は、明確な政治的目標を持つべきである。それが独立国家の樹立であれ、モンゴル国との統一であれ、明確でなければならない。長期的な目的を捨てて短期的な課題だけに集中するならば、それはもはや政治団体ではなく、単なる市民活動団体に過ぎない。政党とは、国家的意志を代表する存在であり、国際社会からもそのように認識される。対照的に、活動団体は一時的かつ限定的な支持しか得られない。

最後に述べておきたい。党首の地位は特権ではない。あくまで役割の一つに過ぎず、党内では他のメンバーと対等であるべきだ。実際、党首は模範を示し、より大きな責任を

負うべき存在である。テムチルト氏がもし、党の指導方針や最終目標の変更が必要だと考えたのならば、それを文書にして党に提出し、討議に付すべきだった。事前に党の過半数の同意を得た上で公に発表していれば、党規約違反にはならなかったはずである。真に容認できないのは、彼が党のルールや手続きを無視し、党内の強い批判を顧みず、解任という圧倒的多数の決定をも頑なに拒否したことである。20年以上も民主的な社会に暮らしていながら、民主的決定を受け入れないのは遺憾である。それどころか、自らを批判する者をすべて「中国のスパイ」として中傷するという手段に訴えている。

この文章のもう一つの重要な目的は、テムチルト氏に追随し、彼の無責任かつ不道徳で有害な行動を助長してきた若い南モンゴル人たちに、自らの過ちを認識し、良心を取り戻してほしいという願いである。もちろん、テムチルト氏が自身の行動が正当であると考えるのであれば、反論記事を執筆することは歓迎する。